

資産としての価値を共有し、環境の中に秩序を再生・創造する

～小田原でのまちづくり活動を事例として～

神戸大学 山崎 義人

キーワード： 人間の価値観、環境の秩序、相互生成、価値の共有

1) はじめに

「環境資産」というと、物的環境のみに視点が向きがちであると考えますが、人間と環境とのかかわりの中で形成されてきた環境の秩序をもう一度資産として価値を共有する、今日の人間の価値観への試みも必要なのではないだろうか？

2) 人間（集団）と環境のかかわり

人間と環境とを二元的対立で考えるのではなく、総合的に全体的に捉える視点の必要性は、地理学や生態学、社会学や経済学など諸分野において今日、共通認識になりつつある。このような人間と環境とのかかわりについての研究のスタンスを大別すると「現象学的アプローチ」と「生態学的アプローチ」の2通りがあることが指摘できる。

現象学的アプローチは、人間の主観的な知覚としての環境像を総合的に分析していくものである。言い換えるならば、人間による意味づけや価値づけが人間にとっての環境のあり方そのものであると考え、環境を人間が価値付けしその価値観にもとづき人為的に秩序化した構成物として捉え、その原理や意味体系を把握するアプローチであると言える。

一方、生態学的アプローチは、人為活動による既存の秩序の攪乱に対応して、安定的で均衡的な状態への環境の遷移のシステムを分析していくものである。言い換えるならば、ある環境におけるエネルギー流や物質循環の中にありながら、人間が生きることで固有の文化的・経済的領域を形成し、またそのことが新たなエネルギー流や物質循環を生み出していく関係を捉えるアプローチであると言える。

人間と環境とのかかわりについて2通りのアプローチを統合的に捉えると図1のように整理できる。人間（集団）が人為的に環境に秩序をつくる

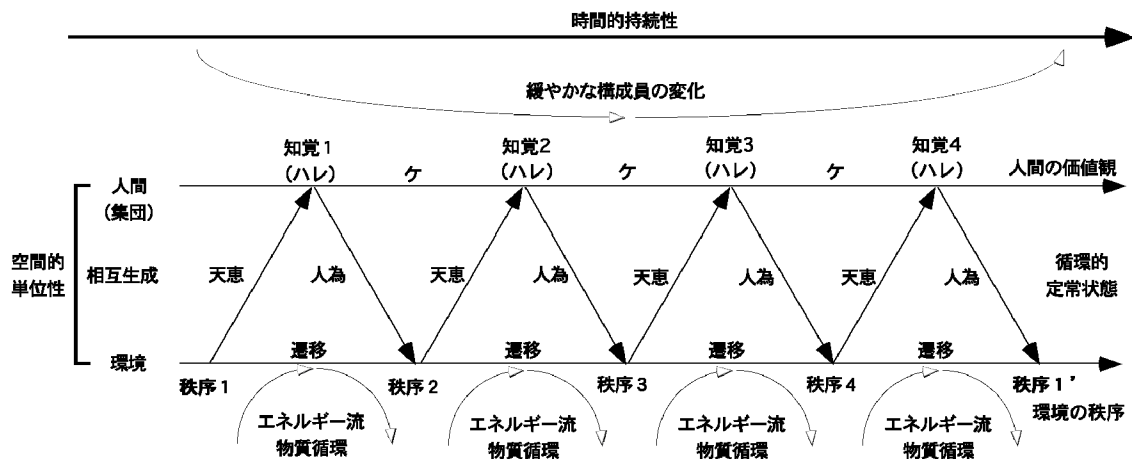
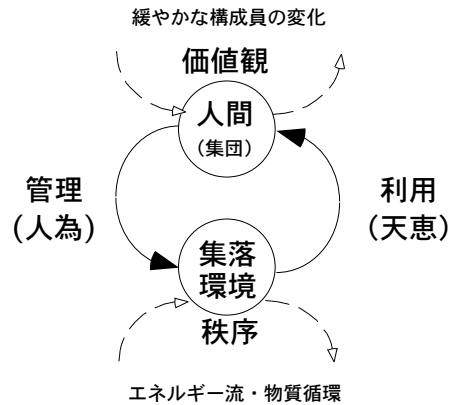


図2 地域社会の人間と環境とのかかわりモデル図

ことにより、環境から人間（集団）に天恵がもたらされ、環境を価値として認識する。しかし、緩やかな構成員の変化により人間（集団）の価値観が乱れ、環境のエネルギー流・物質循環により絶えず環境の秩序は攪乱する。このような乱れを知覚することによって絶えず人為的に環境に秩序をつくる必要がある。このように人間と環境のかかわりは人間（集団）に価値観を生み出し、環境に秩序を生み出す相互生成的な関係であると理解できる。このような関係は生活と生産の未分化な「生業（なりわい）」として理解できる。

このときに環境に生成される秩序こそが「環境資産」である。

3) 地域社会における人間と環境のかかわり

地域社会を考える際に現象学的アプローチをとる場合は、緩やかに構成員が入れ替わる人間集団における意味づけや価値観の共有性や継承性が問題となる。自ずと知覚主体としての人間集団と他の人間集団を区別することになる。そのことが中心と周辺という概念を生み出し、地域社会の圏域設定・単位設定など空間的まとまりに繋がるものとなる。

一方、生態学的アプローチをとる場合は、水や土、気候などの地域資源の利用の循環的な持続性の問題となる。日本のように急峻な地形が多いと自ずと地理条件により空間が限定的となり、その中で環境の持続性という時間的な広がりには繋がるものである。つまり「時間的持続性」と「空間的単位性」をあわせ持つものとして地域社会を捉えられる。（図2）

4) 人口の流動と「環境資産」の価値の継承

伝統的な地域社会は人口の流動がほとんどない閉鎖系として安定的に持続してきたため、環境も持続的に管理され保全されてきた。しかし、今日においては生活と生産が分化し、地域社会の人口の流動性が高まり相対的に開放系に転換した。つまり、人間（集団）の価値観と環境における秩序の相互生成の関係が弱まり、地域社会の空間的単位性も弱まっており、多様な人々が往来しながら地域社会が存立する状況に展開しつつある。

このような今日においては、環境の秩序の断片が散在してしまい、その価値さえ分からなくなってきた。

日々の営みとして環境へ働きかけ天恵を受けて暮らしてきた老齢の方々の頭脳のハードディスクに記録された人生の記憶を集め、地域の社会的な記憶として編み直し、地域の原風景を再現できるようにしておくことが必要になってきている。

これまで口伝によって孫へと伝えてきた生活の知恵は、今後は「環境資産」を価値づける情報として、広く地域内外の人々と共有していくことが必要である。さらにそこで断片化してしまっている環境の秩序の価値を再認識し、それらをつなぎ合わせ、地域の「環境資産」として再生・創造していくことに繋げていきたい。それにより、主体を転換しながらも地域の「環境資産」の価値の時間的持続性を保つことができるのではないだろうか。

5) 価値を知り価値観を共有する試み

これまで私が所属していた早稲田大学後藤春彦研究室では、農山村におけるオーラル・ヒストリーの収集を山梨県早川町や新潟県高柳町、愛知県足助町などでおこなってきた。オーラル・ヒストリーとは社会学などの分野で展開してきているものである。たとえば御厨貴は政治家や官僚、実業家などの聞き取り調査を繰り返すことにより政策決定のプロセスの解明をおこなってきた²⁾。しかし、私たちの試みは政策決定にかかわる重要な個人を対象にするのではない。それこそ、地域社会で日々、地域環境と対峙しながら生活を営んできた人々の人生史とともに語られる地域社会の歴史である。人生という時間軸は地域社会を振り返る際の一つの重要な時間的尺度である。

数多くの人々のオーラル・ヒストリーを採集する度に、地域社会に還元する試みが必要であると痛感している。これらの試みでは公開を前提に数多くの方々の人生史を個人ごとに紙媒体に記録し冊子化してきた。しかし、これでは棚に置かれるのが関の山である。地域住民の方々にこの有益で膨大な情報を届け、断片化してしまった環境の秩

序の意味を理解してもらい、価値観の転換をどのように行ってもらうかが重要な意味をもつと考えた。

そこで私たちは、神奈川県小田原市の元染物屋の蔵を借り「蔵カフェ」と名付けられた地域活性化のイベントにおいて、聞き取りし記録した紙媒体の文章を朗読し、多くの聴衆に聞いてもらい、かつその朗読を呼び水にその聴衆とともに地域社会の原風景を話し合いながら思い出す、「まち語り」と名付けたインスタレーションの手法を開発している。また、数多くの人々のオーラル・ヒストリーを束ね、ある一定の時間断面で横切りにした情報を新聞の体裁に乗せて配布する「懐古新聞」などの試みも行っている³⁾。その後、「聞き書きくん」と名付けた地域情報を共有するコンピュータ・システム開発をも行っている。

農山漁村ではないが地方都市である小田原市で試行を繰り返し、コミュニティビジネスとして成立しないかと期待を広げている。

6) 共有価値にもとづいた環境を秩序化する試み

しかし、オーラル・ヒストリーや「まち語り」「懐古新聞」などの試みは、価値観の共有を目指して行っているはじめの第一歩に過ぎず、現象学的なアプローチに偏っているとと言える。

共有した価値観にもとづいて、次は環境に人為的に働きかけ具体的に空間化・場所化し環境の秩序化を展開したいと考えた。つまり、生態学的なアプローチへの展開である。歳時記・年中行事などで地域内外の人々が協働していくことがそのヒントになるのではないかと考えた。

そこで、先述の「蔵カフェ」において、行事などによく利用されてきた竹に着目し、近くの寺社の裏山の竹を切り出し、簡単な構造物の日よけや縁台を作製し、にぎわいの景観を演出した。これらに触発された市民・地域住民たちは現在旅館として利用されている明治期の別邸の庭園において管理が行き届かず荒れていた竹藪を、近隣の公共施設で開催される「秋の交流会」というイベントにあわせて、所有者に了解を得て竹を間伐し、その竹で 100m 近くの竹垣を手づくりでつくり、景観形成を行う動きへとつながった。さらに、小

田原まちづくり応援団準備会の設けた「まちえんカフェ」というまちづくりの拠点の内装にも竹が利用された。これらは、単なる景観形成／演出に留まるものではなく、地域社会や市民社会において竹を環境資産として価値付け直したことにより、竹によって環境を秩序化していく行動が広がったと理解できる。

さらに小田原市の市民団体である「やんべえ倶楽部」では、古老などへ独自にオーラル・ヒストリー調査を行い、かつて小田原市内で行われていた竹を長くつかうことが印象的な小田原流の門松を復活させた。はじめは、小田原宿なりわい交流館という公共施設にのみ設置していたが、今年の正月は、その公共施設に近接する国道 1 号線沿いに 40 本ほど設置した他、老舗の商店など設置箇所を増やしている。

この試みによって、断片化してしまっている環境の秩序の価値を再認識し、それらをつなぎ合わせ、地域の環境の秩序として再生・創造していくことにつなげることができたと考えている。これら展開により市民活動を新たな主体として位置づけ直していくことで、地域の「環境資産」の価値を持続的に保っていく可能性があるかと確信している。

そして、ゆくゆくは図 1 に示した人間の価値観と環境の秩序の相互生成の関係にまで発展させていきたい。

【参考引用文献／補注】

- 1) 山崎義人「高流動性社会を背景とした過疎地の集落環境の利用管理に関する研究」早稲田大学博士論文、2004. 3
- 2) 御厨貴「オーラル・ヒストリー 現代史のための口述記録」中公新書、2002. 4
- 3) 田口太郎・後藤春彦・山崎義人「神奈川県小田原市における「まち語り」「懐古新聞」の取り組み まちづくり・オーラル・ヒストリー研究その 1」
- 4) 後藤春彦研究室編著「まちづくり批評 愛知県足助町の地域遺産を読む」ビオシティ、2000. 7
- 5) ドロレス・ハイデン著、後藤春彦他訳「場所の力 パブリック・ヒストリーとしての都市景観」学芸出版、2002. 3
- 6) 小田原市政策総合研究所「小田原オーラルヒストリー調査技術移転マニュアル」2003. 3
- 7) 中神賢人「口述調査記録のデータベースの開発に関する研究」早稲田大学修士論文 2